

ネコのサマー



(Drawn by Hinako FUJIMURA)

結婚して1年がたったころ、妻が実家からネコを連れてきた。名前はサマー。メス。全身真っ黒だけれど、お腹の辺りだけが茶色になっている。家に来たときには、すでに5歳ぐらいだったと思う。人間の年なら、35歳ぐらいだろう。立派な大人のネコだ。

サマーは比較的おとなしく、ときどき家の壁をガリガリやったり、夜中にニャーニャーと鳴いて私たちを起こしたりする以外は、あまり手のかからないネコだった。外ネコだったので、気まぐれに外に出て行った。けれど、エサの時間にはだいたい家に戻ってキャットフードを食べたし、寝るときも家で寝た。

もともと私はネコより犬の方が好きだったので、ネコを飼ったことはなかった。壁をガリガリされるのがいやだったし、ネコはあまり懐かないと思っていた。しかし、サマーを飼ってからは、私はすっかりネコ好きに変わってしまった。私が家に帰ったら、サマーは玄関まで出迎えてくれるし、のんびりテレビを見てると、膝の上に乗って、ゴロゴロ気持ちよさそうに眠る。思った以上に人懐っこいのだ。

ある秋の日、サマーがいなくなった。それまでも、ときどき2日ぐらいは帰って来ないこともあったが、3日目にはいつもちゃんと家に帰ってきた。けれど、今度は、3日たっても、5日たっても帰って来なかった。家の近所には悪そうな白いどらネコがいるから、それに追いかけて、迷子になってしまったのだろうか。それとも、どこかの家の車庫に潜り込んで、出てこられなくなったのか。心配になった妻と私は、家のそばを探すことにした。

ネコの行動範囲は意外に狭い。迷子になったネコは、においを頼りに帰ってくることがあるので、そのネコが使っていたトイレの砂をところどころにまいておけばいいと、インターネットに書いてあった。妻と私は、サマーのトイレの砂を袋に入れて、近所を探し始めた。

何日も探した。トイレの砂もいろいろなところにまいた。遠くの方で黒ネコが見えて、追いかけたこともあった。でも、サマーは見つからなかった。サマーがいなくなって、10日以上が経っていた。

ある日、保健所から妻の携帯電話に電話がかかってきた。妻は、だれかがサマーを見つけたら連絡をくれるように、保健所にも伝えておいたのだ。保健所からの電話は、サマーに似た特徴のネコがゴミ処理場に置かれているので、見に行つてほしいということだった。

妻と私は急いでゴミ処理場に向かった。ゴミ処理場の奥には、冷蔵庫があった。冷蔵庫に置いてあった黒いビニール袋を開けると、全身の黒い毛と、お腹の茶色い毛、それにピンクの首輪が見えた。サマーだった。苦しそうな顔だった。私の家のそばで、車にひかれていたのだそうだ。サマーは死んでしまった。

ゴミ処理場からサマーの死体を引き取って、私たちは、サマーを火葬した。そして、サマーの灰を庭に埋め、その上にハナミズキの木を植えた。これで、壁をガリガリされることはなく、夜中にニャーニャー起こされることもない。前の生活に戻っただけだ。

その1週間後、妻の妊娠がわかった。女の子だった。ハナミズキは、毎年春になると、きれいなピンクの花を咲かせている。

(1283 字)

(2021.4 Written by Toru YOSHIKAWA)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.